



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

アンネ・フランク・センターによる人権を重視した
異文化間教育活動：
ドイツにおけるアンネ・フランク巡回展とガイド・
トレーニング：研究ノート

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-08-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 亜希子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/132313

アンネ・フランク・センターによる 人権を重視した異文化間教育活動

——ドイツにおけるアンネ・フランク巡回展とガイド・トレーニング——

Intercultural Education Focusing on Human Rights by Anne Frank Zentrum Berlin:
Traveling Exhibition and Guide Training in Germany.

伊藤亜希子 (山梨大学大学教育研究開発センター)
Akiko ITO (University of Yamanashi)

<要約>

本稿は、多文化社会ドイツにおける差別の問題に取り組むアンネ・フランク・センターの活動の中でも、アンネ・フランク巡回展とそれに付随した研修であるガイド・トレーニングに焦点化し、その概要と実際について、ガイド用マニュアルと筆者の参加観察から提示することを目的とした。アンネ・フランク巡回展は、アンネ・フランクとナチス・ドイツを中心としたヨーロッパ社会におけるユダヤ人迫害やホロコーストをテーマとしたパネル展である。青少年向けに作成されたこのパネル展の特徴は、以下の3点に大きくある。第一に、過去の差別のみならず、現在の差別の問題に関しても青少年の目を向けようとする点、第二に、パネル展のガイドを青少年自身が担う点、第三に、参加型の活動を中心としたガイドを行う点である。ガイドを育成するガイド・トレーニングに参加する青少年には、自分の暮らす地域やドイツ社会における差別に向き合い、そうした傾向に立ち向かおうとする姿が見られた。多様な文化的背景を持つ人々が暮らすドイツ社会において、アンネ・フランク・センターが推進する差別や人権問題をテーマに据えた教育活動は、人権教育としての側面を持ち、人権を重視した異文化間教育活動と言えるものである。

*キーワード：アンネ・フランク、差別、人権、ガイド・トレーニング

1. はじめに

第二次世界大戦中にナチス・ドイツによって行われたホロコーストの犠牲者の代表とされるアンネ・フランクについての学習は、戦争の歴史や戦時下のユダヤ人迫害だけでなく、今日においてもなお課題である差別や人権について学ぶための一つの切り口となっている。これは、アンネの家族らが潜んだ隠れ家を現存し、現在は博物館としてそれを運営しているアンネ・フランク・ハウス (Anne Frank House Amster-

dam, Anne Frank Stichting) が推進している教育活動でもある⁽¹⁾。こうした教育活動の推進をヨーロッパを中心に支えているのは、アムステルダムにある組織を含め、世界6カ所に置かれている関連組織である。その一つ、ドイツのベルリンに設置されているアンネ・フランク・センター (Anne Frank Zentrum Berlin, 以下、AFZ と略す)⁽²⁾では、アンネ・フランクとナチス・ドイツ、第二次世界大戦に関する常設展を行うと同時に、巡回展や関連する研修の開催、ホロコーストの歴史や差別、人権などをテーマ

とした学習材の開発を行っている（伊藤，2010）。

ドイツ社会は、戦後の外国人労働者の受け入れ、かれらの定住化による移民の増加、難民の受け入れ、EUの拡大などにより、異なる文化的背景を持つ多様な人々が暮らす社会となっている。しかしながら、こうした文化的背景の異なる人々の共生は容易ではなく、90年代以降、ネオナチに代表されるようなゼノフォビアやイスラム嫌悪（イスラモフォビア）が顕在化している。これに加えて、依然として反ユダヤ主義も存在しており、ドイツ社会から他者に対する差別が解消されているわけではない。

本稿は、こうした社会の中で、AFZが重点的に行っている活動の一つである、アンネ・フランク巡回展とそれに関連した研修であるガイド・トレーニングに焦点化し、その概要と実際を提示する。ガイド・トレーニングに関しては、トレーニングやガイドの際に活用されるマニュアルの内容を提示し、2010年11月に筆者が参加した際のトレーニングの模様について触れることにしたい。

アンネ・フランク巡回展は、文字通り、アンネ・フランクと彼女の家族、ナチス・ドイツを中心としたヨーロッパ社会に関するパネル展である。このパネルには、第二次世界大戦時の過去の差別や人権侵害だけでなく、戦後の人権問題に関するものも含まれており、巡回展を用いた教育活動は人権教育の側面も強い。多文化社会ドイツに生きる青少年、そしてかれら自身の多くが多様な背景を持つことを考えると、こうした人権教育の側面を持つ活動は、異文化間教育の一つとして重視すべきものであろう。この意味において、巡回展とそれに関連するガイド・トレーニングは、まさに人権を重視した異文化間教育の普及に寄与していると言える。

2. アンネ・フランク巡回展 「アンネ・フランク ——今日に向けた物語——」

巡回展用のパネルにはいくつかの種類がある。パネルの大きさや分量が異なっており、巡回展の会場の広さに応じて選ぶことができる。どの形のパネルであっても、巡回展のコンセプトやそのパネルが伝えようとする内容が大きく異なることはない。この巡回展には、次のような目的がある（Anne Frank Zentrum, 2009, S. 6）。

- ①アンネ・フランクと彼女の家族の視点から、ホロコーストの歴史について教える
- ②どの社会においても、人々の間には（社会的、文化的、民族的、宗教的、政治的等）差異が存在する
- ③こうした差異があるにもかかわらず、人は皆平等である
- ④こうした差異が尊重されず、あるグループが他の者よりも優位に位置づけられると、マイノリティに対する差別に至る
- ⑤トレランスは相互尊重、人権、民主主義などのように多元的価値に取り組むよう求める
- ⑥人々の間にある差異が尊重される社会は、社会が存在するだけでは実現し得ないと納得させる。これには、法と並び、個人の持つ可能性の中で個々人が関わる必要があり、個々の姿勢や態度は予期せぬほどの大きな影響を持つと伝えられなければならない。

これらの目的を見てみると、単にホロコーストに関する知識のみを伝えるのではなく、差別や人権侵害がどのような状況下で生じるのか、それを防ぐには、われわれが社会のなかでどのような点に価値を置き、重視すればよいのかを伝えようとしていることが分かる。こうした目

的の下で作られた巡回展のパネルは、アンネと家族を中心に据えながらも、ナチス独裁下でユダヤ人迫害や戦争へと突き進んでいく社会の動きが描かれている。これはテーマごとに、次の5つの時代区分に分けられている（Anne Frank Zentrum, 2009, S. 7-9）。

〈時代1：1929-1933〉

1929年はアンネ・フランクの生まれた年であり、1920年代のドイツは政治的にも経済的にも良い状況にはなかった。ナチスはドイツ民族には特別な使命があるという考えを強調し、ユダヤ人や他のマイノリティを当時の困難な状況に対するスケープゴートとしていた。アンネ・フランクは幸せな幼少期をドイツで送っていたのだが、社会の変化を両親は認識していた。この時代を表すパネルでは、アンネ・フランクと家族がフランクフルトで普通の生活を送っている様子が示されている。

〈時代2：1933-1939〉

1933年はオットー・フランクが家族とともにオランダ移住を決めた年である。オランダ、アムステルダムには新たな仕事のチャンスもあった。同じく1933年はナチスが政権を執った年でもあった。その後のドイツは、ユダヤ人やその他のマイノリティを排斥する動きが強まり、その最たるものが1938年11月9日の迫害⁽³⁾であった。こうしたドイツの状況を考えると、アンネと家族にとってはアムステルダムがまず安全な場所であることは間違いなかった。厳しい社会状況にありながらも、アンネは大きな苦しみや悩みのない子ども時代を過ごしていたことが日記から読み取れる。

〈時代3：1939-1942〉

1939年はドイツがポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が勃発した年である。アンネと家

族はすでにオランダにおり、西ヨーロッパではユダヤ人やその他のマイノリティの身にはまだ何も生じていなかった。だが、東ヨーロッパではマイノリティに対する直接的な暴力行為が始まっており、多くの都市でユダヤ人がゲットーへと強制移住させられていた。

1940年5月にドイツ軍がオランダに攻撃を仕掛けたことで状況は一変した。逃れることはもはや困難であり、西ヨーロッパにおいてもナチスがユダヤ人やその他のマイノリティの社会的排除を始めた。1941年にはソ連に侵攻し、強制移送が始められ、計画的なユダヤ人殺害がますます現実的なものになってきた。

1942年6月には家族の中で初めてマルゴーに召喚状が届き、これが家族の隠れ家生活のスタートを早めることになった。

〈時代4：1942-1945〉

1942年から1944年まで、隠れ家ではアンネと家族、ファン・ペルス夫婦と息子のペーター、歯科医のプフェファールの8人が生活していた。アンネは日記の中で、全員に別の名前をつけている。パネルでは、アンネの部屋がどれほど狭かったのかを想像できるようにしており、アンネの日記からの引用は隠れ家での当時の印象を補足している。

1944年に隠れ家の住人は裏切りに合い、逮捕され、ヴェスターボルクの収容所に入れられ、その後、アウシュビッツに移送される。パネルでは、ハネス・ヴァイス（Hannes Weiss）、ルート・ヴァラーゲ＝ビンハイム（Ruth Wallage-Binheim）、ヤニーナ・バウマン（Janina Baumann）らのような証人らが、移送を逃れることは不可能であったこと、シンティ・ 로마の運命や絶滅収容所でのユダヤ人の殺害について語っている。

オットー・フランクを除き、隠れ家の住人は異なる強制収容所や絶滅収容所でみな殺されて

いる。

〈時代5：1945- 現在〉

ナチスからヨーロッパが解放された後、あらゆるところで再出発のムードが漂っていた。戦争や迫害の終わりの喜びと共に、多くの苦悩があった。自分の親戚と再び会いたいという多くの人が抱いた希望は落胆に変わった。戦争が終わった最初の年は、ユダヤ人の苦しみに対してそれほど注意が払われたわけではなく、過去のことはできる限り早く忘れてしまいたいと思っていた。多くの人々が孤独で、故郷をなくしていた。

アンネとマルゴーがベルゲン＝ベルゼンの強制収容所でチフスで亡くなったと分かった後、ミーブ・ヒースは隠れ家で見つけたアンネの日記をオットーに手渡した。オットーはその出版を決意し、それ以降、第二次世界大戦時のユダヤ人迫害と『アンネの日記』を多くの人が結びつけるようになった。戦後は、将来、戦争やジェノサイドが二度と起こらないようにと国際連合が設立され、人権宣言が出された。しかし、レイシズムや反ユダヤ主義、その他の差別が1945年になくなってしまったのではなく、今日のわれわれの社会においても存在している。

パネルが明確に示しているのは、レイシズムや差別と戦うのは国家の課題であり、それと同時に個々人の責任でもあるということである。

巡回展の展示パネルは、以上のような歴史の流れとアンネと家族の物語を関連づけながら、差別がどのように行われ、それが差別される者の生活をどのように制限することになり、最終的には命を奪うことになったのか、つまり人権侵害がどのように行われていったのかを見る者に伝えている。また、この展示は過去に留まらず、戦後から現在にかけての人権や差別の問題を示す写真も含んでおり、差別が過去の出来事

ではなく、今日においても差異に起因した差別が依然として存在していることを見る者に知らしめている。

この巡回展は学校や学校外など、とりわけ、青少年の目に触れるような場所で行われており、歴史や平和、人権に関する学習の場として活用されている。

3. 巡回展を担うガイド・トレーニングの実際

アンネ・フランク巡回展の一つの特徴は、見学に来る青少年と同年齢の青少年がガイドを担うことにある。一般的に展示を見るというと、受け身的なものを想像し、展示を何気なく見ていくだけでは、学習効果はそれほど上がらない。この巡回展の場合は、そのように展示を見るだけではなく、展示のガイドや同じように見学しているグループの仲間との双方向的なやりとりを行うことで、学習効果の向上が目指されている。これはピア・エデュケーションの効果をねらっており、ガイドとしてのトレーニングを受けた青少年が、見学に来た青少年の学びを支え、そしてそれがかれらにとっての一つのロールモデルにもなっている。

こうした役割を持つガイドを育成するために、AFZは2日間のガイド・トレーニングを提供している。これはアンネ・フランク巡回展の持つ教育的側面の重要な一つであり、AFZがスタッフをトレーナーとして派遣して、巡回展が開催される現地に研修が行われる。巡回展を受け入れる地域のオーガナイザーが、ガイド・トレーニングに参加する青少年を募集するが、具体的には、後期中等教育段階の青少年に学校を通して呼びかけ、関心のある16歳以上の生徒を紹介してもらっている。トレーニングは2日間（1日約8時間）にわたり、巡回展の展示が設置されている会場で行われ、実際のガイドの流れに沿って提供される。グループ・ガイド

は 100 分間を想定した流れが出来上がっており、それに沿って、トレーニングの参加者は、2 日間の中で関連ビデオの視聴や自分たち自身が実際のガイドで行われるさまざまな参加型活動を体験し、その手法や見学者との対話のヒントをトレーナーから学ぶ。それと共に、パネルの説明の仕方やガイドを双方向的なものにするための留意点を学んだり、実際に自分でパネルを選び、ガイドのリハーサルを行い、トレーナーや他の参加者から助言をもらったりする時間も設定されている。また、ガイド・トレーニングが終了すると、AFZ から派遣されるトレーナーはベルリンに戻るため⁽⁴⁾、ガイドとなる青少年が自律的に活動を行うために、アンネ・フランク巡回展に関するマニュアルが配布される。これにはガイドの進め方はもちろんのこと、パネルの写真に関する解説も載っており、どの写真の場合にどのようなテーマで話ができるか、どのような質問を見学者に投げかけることができるかなどが書かれている。このようなガイドの基本的な情報は、トレーナーから伝えられるのだが、それは必ずしもすべての写真に関することではない。その点を考えると、ガイド・トレーニングでトレーナーが話した情報やパネルの写真に関する情報が含まれるマニュアルは、参加者にとって非常に有効なものである。

このように、青少年がガイドとしての役割を果たすための支援が行われているわけだが、ガイド・トレーニングの実際はどのようなものだろうか。筆者は、2010 年 11 月 23 日、24 日の 2 日間にわたり、ドイツ東部テューリンゲン州アルテンブルクのギムナジウムで行われたガイド・トレーニングに参加しており、ここではその参加記録から、ガイド・トレーニングの進め方や青少年の様子など、その実際について述べておきたい。

(1) ガイド・トレーニング 1 日目

AFZ から 3 名のスタッフ⁽⁵⁾が派遣されており、パネルが展示されるギムナジウムの生徒 21 名が参加した。1 日目の日程は、①挨拶、②最初のコミュニケーション（グループ分け）、③スケジュールの確認、④参加型活動の方法：例 1）法律、⑤参加型活動の方法：例 2）ギャラリー・ウォーク、⑥ビデオ視聴「アンネ・フランクの短い人生」、⑦パネルの説明、の順で行われた。

①挨拶及び②最初のコミュニケーション （グループ分け）

最初にトレーナーの簡単な自己紹介の後、アンネ・フランクやナチスの時代に関する知識を参加者がどの程度持っているのかを把握するための質問等に入った。具体的には、アンネ・フランクについて「あまり知らない」、「よく知っている」、第二次世界大戦時の歴史について、「まだ詳しく学習していない」、「すでに学習した」というような 2 択で話を進めていった。これらに加え、趣味や年齢などによって分かれてもらい、2 つのグループがおおよそ同数になったところで、グループ分けを終えた。

③スケジュールの確認

次にグループに分かれ、トレーニングの日程確認を行った。筆者はスタッフ A がトレーナーを務めるグループに入った。このグループは 12 名で構成され、最初に他者紹介を行うためのインタビューシートを埋め、全員の前で他者紹介を行った。このインタビューシートには、氏名、年齢、学校、趣味、話すことのできる言語、参加の動機のほか、「今日においてもなおアンネ・フランクの人生に取り組みなくてはならないのか」、「地域や学校において、『右翼』や『ナチス』というものはどの程度活発なものなのか」、「地域の中で変えたいと思うことはあるか」といった質問項目が含まれていた。

他者紹介の中では、「外国人敵視をなくしたい」、「ネオナチやNPD⁽⁶⁾のデモに対して何かしたい」、「差別に対して自分たちが何をできるか考えたい」といった主旨の発言が多く見られた。これらの発言からは、アンネ・フランク巡回展での学びを契機に、自身の暮らす地域の問題にも取り組もうとする青少年の姿勢が窺い知れる。

④参加型活動の方法：例1) 法律

参加型活動は、実際に参加者がガイドとして活動する際に取り入れることのできるもので、まずは参加者自身が体験していた。「法律」に関する参加型活動として、最初に「法律」という言葉を聞いて、参加者がイメージすることを挙げていった。ここでは、「規則」、「制限」、「罪」、「権利と義務」、「秩序」、「基準」、「破るもの」、「価値と規範」、「防止」といったことが参加者から出された。これらに、「ドイツ基本法」やそこに示される「人間は皆平等」ということが最後に加えられた。

こうして「法律」のイメージを共有した後に、「とても普通の1日(Ein ganz normaler Tag)」という活動に入った。ここでは、スタッフAが「今日は火曜日だから、あなたたちの火曜日はどのような1日?」と問いかけ、それぞれ朝起きてから夕方までの行動について挙げていった。例えば、「起きる」、「朝食をとる」、「シャワーを浴びる」、「着替える」、「学校に行く」、「授業を受ける」、「友達と会う」、……「映画に行く」、「宿題をする」、「寝る」といったようにごく当たり前のことを挙げていく。参加者が言ったことをスタッフAは模造紙に書き留め、一定程度挙がったところで、今度はカードを配る。そのカードには年代とユダヤ人迫害に関わって行われたことが記載されている。参加者は自分たちの受け取ったカードが1933年から時代順になるよう読み上げていき、スタッフAはその内容と模造紙に書かれたことを比べ、「で

きなくなったこと」を消していく。これを進めると、参加者たちが挙げた日常の行為のかなりの部分が消え、ユダヤ人の生活が制限されていた様子を一目で理解することができる。

この後、再び「法律」の話に戻り、スタッフAがヒトラー政権以降のユダヤ人の制限について、ダビデの星の着用やユダヤ人公務員の免職などの話をし、日常生活のあらゆる部分にナチズムが浸透していったことの説明を行った。ここでスタッフAは現代との関連づけで、「今のドイツに差別的な法律はあるだろうか」と参加者に問いかけた。これに対し、「ない」と答えた参加者もいたが、「ホモセクシャルの人は結婚ができない」ということを挙げた参加者もいた。その他、スタッフAが庇護権請求難民の話为例に、「庇護請求を求めた場所から移動できないのは差別では?」と投げかけた。庇護の請求が認められるまで、庇護権請求難民は移動や就労に関して一定の制限があるのだが、これに対し、「戦争地域にいるよりは、制限があってもドイツにいるほうがいいだろう」といった発言もあり、参加者同士の議論が展開された。

この活動を行い、こうした議論が展開するのも参加者の年齢に拠るところが大きい。スタッフAはこの活動は導入に使うことができ、やり方を工夫することで6学年から12学年まで使用できると説明をした。

⑤参加型活動の方法：例2) ギャラリー・ウォーク⁽⁷⁾

この活動では、グループをさらに3つのグループに分け、写真を活用し、写真からさまざまな事象を読み取ることが目指される。模造紙の中央に拡大した写真を貼り、各グループが5分間、1枚の写真を見て、気づいたことや疑問などを写真の周りに書き出し、5分経つと別の写真のところに移動し、同じ作業を繰り返す。それを一巡するまで行う。自分のグループが担当する写真に戻ると、今度は模造紙に書かれた

コメントを受けながら、写真に描かれていることを皆の前で説明する。

ここでは、3つのグループに分かれたため、3枚の写真が用いられた。1枚目は、学校で黒板にダビデの星が描かれたもの、2枚目はお金の山で子どもが遊んでいるもの、3枚目は姉と弟が写っているものである。まずは、スタッフAが1枚目の写真を例に写真の説明をして見せた。「何が教えられているか。ユダヤ人に関することで、信仰のこと、アーリア人との違いなど当時の人種理論などについて学校で教えている」といった内容であり、それが当時のナチスのプロパガンダであることを説明する。説明上、重要だと思われる概念についてはその都度、確認していく。こうした説明の例を受け、参加者はガイドになったつもりで写真の説明を行う。

この活動を通して、スタッフAはこの活動の手法に一体どのような意味があるのかを参加者に考えさせる。言葉での説明以上に写真が明らかに示すものがあり、それをどう理解するかという点が重要となるため、ギャラリー・ウォークは年齢が比較的高い生徒に適していると説明がなされた。

④と⑤のように参加型の活動を自らが体験し、その手法を学ぶことで、どの手法がどの年齢段階の見学者に適しているかを、ガイドとして活動をしていく参加者に考えさせていく。

⑥ビデオ視聴「アンネ・フランクの短い人生」

これはアンネ・フランクの短い人生を語った28分のビデオ映像である。日記の引用やアンネ・フランクの家族の写真、歴史的な記録などを用いて、アンネ・フランクの誕生、フランクフルトでの生活、ナチスの台頭、進むユダヤ人迫害、アムステルダムへの移住、オランダ占領、隠れ家生活、逮捕、強制収容所への移送、終戦、オットー・フランクの生還、日記の出版といった一連の物語が描かれている。日記の引用によるアンネの言葉や当時の写真などを多様

に用いたこの映像を見ることにより、『アンネの日記』やすでに学んでいた歴史の内容を参加者の中に呼び起こし、当時のユダヤ人の生活に関するイメージ等を作りやすくしている。

⑦パネルの説明

パネルの説明では、最初に参加者にどの程度のパネルが設置されているのかを見て回る時間を与え、その後、パネルがどのような構成になっているかの説明を行った。パネルに描かれる内容が5つの時代区分に分けられることは既に述べたが、そうした説明と共に、ドイツ社会の説明とアンネ・フランクと家族の物語が交互にパネルで描かれている点など、パネルの特徴についても説明がなされた。

スタッフAが実際にいくつかのパネルの説明をしながら、参加者に質問を投げかけ、対話が成り立つように工夫を行っていた。例えば、「アンネ・フランクの家族にとって、オランダ移住は『移住 (Emigration)』なのか、『逃避 (Flucht)』なのか」、「どういったことがその要因となったのか」と問いかけ、「移住」と「逃避」の違いや大人にとっての移住と子どもにとっての移住の違いを考えさせていた。また、ブランドンブルク門の前でナチスが行進する写真を見て、「今のドイツでこういったナショナリズムはあるか」との問いに対し、「ナチスのナショナリズムとは異なるが、サッカー」と答えた参加者がおり、その理由について説明させたりしていた。その他、ダビデの星をつけた人々に対するさまざまな反応として、支援者やレジスタンス、ナチスのイデオロギーがさらに展開する様相について説明し、隠れ家生活のパネルに入るところで、「このような状態の人々を助けたことはあるか」、「(支援者に見られる)『市民の勇気 (Zivilcourage)』を知っているか」といった問いかけを行っている。「市民の勇気」という点については、今日のドイツ社会において、青少年の暴力を見過ごさずに、それを注意した

結果、暴力の犠牲者になってしまった人々の話なども参加者と共に行っていた。

写真の中には目を覆いたくなるような悲惨な写真も含まれるが、そうした写真の必要性についてもガイドとなる参加者は認識しておかねばならない。それについても問いかけを行い、参加者からは「何も知らずに悲惨な写真や映像を見たらショックだ。しかし、実際に何が行われ、その結果このように人が扱われたのだということは示す意味がある」といった発言がなされていた。こうした写真を含め、パネルからは、他者の尊重の必要性を感じ取り、それを学ぶ重要性についてもスタッフ A が指摘していた。

参加者の中には、「過去のことについて自分は何もできない。もちろんひどいと思うし、知らないといけないと思う。しかし、前を見るべきなのではないか」といった質問がなされた。この質問に見られるような、ドイツ人は十分にナチズムの過去について反省してきたのだから、過去に拘泥する必要はないといった意見は、ドイツ社会の中にも見られる。これに対し、スタッフ A は、「今の（差別等に関する）問題を考えていくのに、歴史を学ぶことは助けとなる」と答え、ナチス占領下のユダヤ人迫害がどのように社会の中で構造的に進められたきたかを知ることが、今日の差別の問題を考えることと無関係ではないといった説明を行っていた。

1 日目の終了時には、ガイド用のマニュアルが参加者に配られ、自宅で一度目を通して来るのが勧められた。マニュアルにはトレーニングでは十分に説明しきれなかったことなども記載されており、1 日目の活動内容を振り返り、2 日目のトレーニングに備えるためにも有益なものであった。

(2) ガイド・トレーニング 2 日目

2 日目は、アイスブレイキングの後、①ピア・エデュケーション、②ガイドに必要なこと、③

ガイドの内容構成、④ガイドのリハーサル、といった流れで進められた。

①ピア・エデュケーション

アンネ・フランク巡回展の特徴は、既に述べた通り、青少年が見学者の青少年をガイドすることにある。このガイドが、他の博物館のガイドや市街地の案内とはどう異なるのかを参加者にまずは考えさせている。青少年がガイドを行う場合は、専門家のガイドと異なり、青少年の目線から興味を持ってガイドが行われること、青少年のグループの結びつきができること、ガイドと見学者が同等でいることなどが説明に挙げられた。

しかし、ピア・エデュケーションをねらった青少年のガイドが利点ばかりかというところではない。見学グループのまとめ方や質問の仕方など、青少年のガイドでは専門家のガイドに比べて十分に行うことができないこともある。そのため、トレーニングの中で教育的なヒントとして、見学者に対する質問のたて方も示されていた。まずは、経験や一般的な知識に基づく質問から入り、それから自身の意見を求めるような質問に展開するといったアドバイスがなされていた。また、すぐに細かい部分に入っていくような質問は前提となる知識がないと答えにくいこともあるとの指摘も行っていた。

②ガイドに必要なこと

では、ピア・エデュケーションを目指したガイドにはどのようなことが求められるのだろうか。ここで 1 日目に分かれた 3 つのグループになり、それぞれがガイドに必要なことを絵に描いてまとめる活動を行った。各グループが思い思いにイラストを描き、説明を行ったが、ほぼ共通して見られたのは、「アイコンタクトをとる」、「話を聴く」、「笑顔」などで、すべてのグループに意見を出させてから、スタッフ A がそれを基に整理をしていった。それは、「話

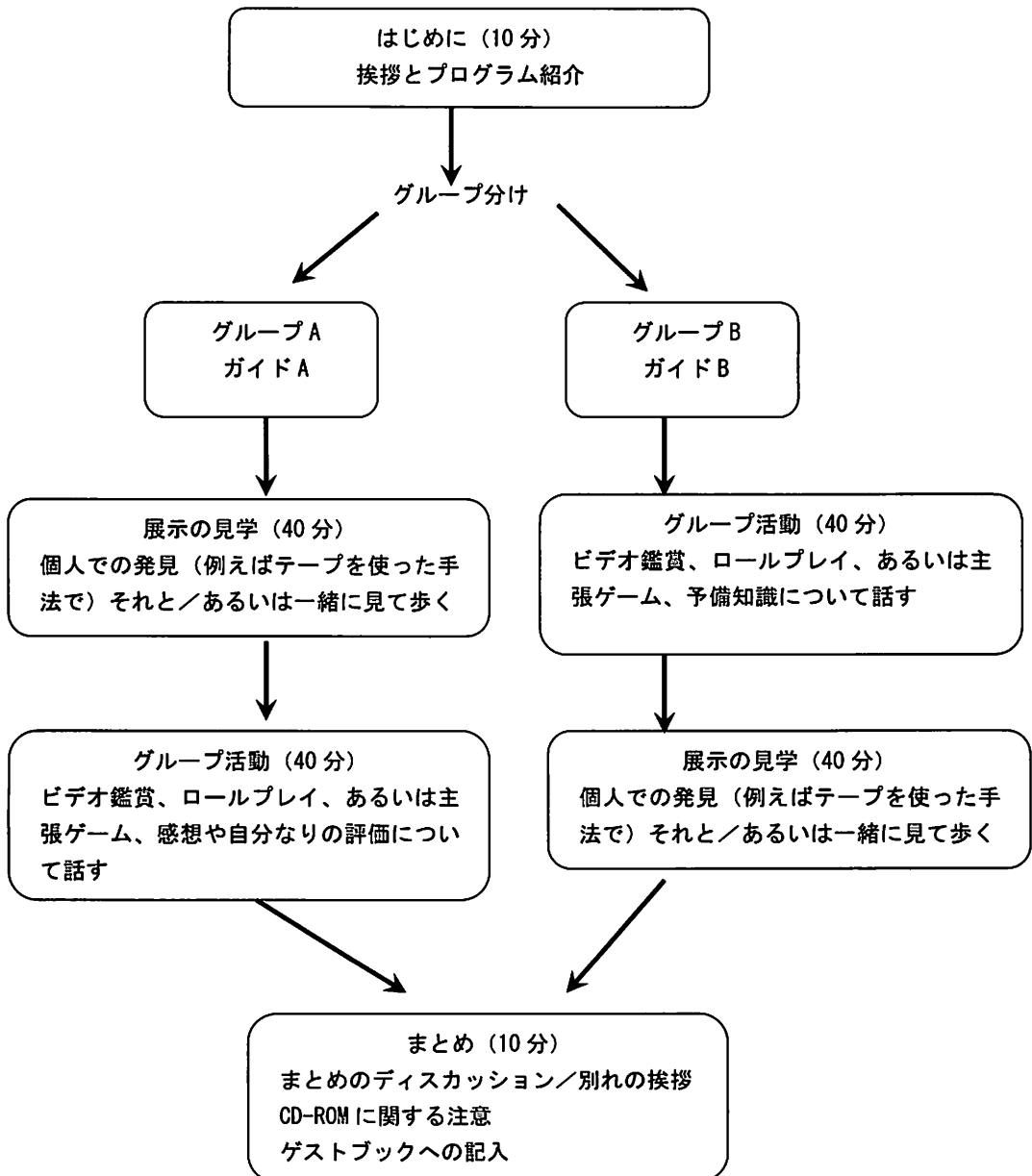
を聴く」、「反応する」、「自分の立ち位置をはっきりさせる」、「事実に関する知識」、「アイコンタクト」、「話上手である」、「笑顔」といった点であった。パネルで示される内容に関する知識も必要であるが、ここではとりわけ見学者が話しやすかったり、活動に取り組みやすいような雰囲気を作るために必要なのが強調された。

実際にこれらは見学者のガイドに対する親しみやすさとともに、ガイド自身が見学者に話を聴いてもらい、対話を成立させるために必要な点だといえるだろう。

③ガイドの内容構成

ここでは、マニュアルに示されたグループ・ガイドの流れについてスタッフAが説明した後、

図 グループ・ガイドの流れ（100分の場合）



(Anne Frank Zentrum, 2009, S.13 より訳出)

30人の生徒を2人のガイドで対応するという状況を想定し、実際に120分間のガイドの内容構成を行った。

3グループに分かれていたので、6学年・7学年の生徒の場合、8学年・9学年の生徒の場合、10学年・11学年の生徒の場合、それぞれのガイドの内容構成を自分たちで検討した。その際、1日目のトレーニングで行ったことを振り返りながら、内容を組むように指示がなされ、挨拶をどのようにするのか、参加型活動を行うセミナーではどのような手法を採るのかなどを検討しながら、内容が構成された。

内容構成に時間を要したため、各グループにコメントがなされたものの、主として6学年・7学年の生徒にガイドを行う場合の内容構成に基づき、スタッフAが参加者と細かく見ていった。このグループが作成した内容構成は次のような流れである。挨拶に始まり、見学者の持つ知識によってグループ分けを行う。そして、トレーニングの1日目に体験した活動「とても普通の1日」の活動を行い、ビデオを視聴する。休憩を挟み、展示に移動し、まずは自由に展示を見て回り、それからガイドが写真を15枚程度説明する。そして再度休憩を挟み、活動全体を総括し、活動を終える。

スタッフAはこの構成案を聞き、グループ分けに関する注意を行った。2つのグループを並行して行う場合は、参加型活動とビデオ視聴の時間、展示を見る時間を入れ替えることによって、ガイドを同時並行する。最初と最後については、全員揃って行うため、グループを分ける場合には、それぞれ同じ時間に終わるように調整しなくてはならない。また、展示の部分については、想定される活動時間40分のうちに15枚の写真を説明するのは無理であるので、5枚から9枚の写真に留めるほうがいいとの助言があった。

この他、120分のガイドの中で学年によっ

て焦点化できる点が異なると考えられるが、8学年・9学年であれば歴史に焦点化して活動を構成することも可能である。また、見学者の学年が上がれば、参加型活動の内容を増やせるというわけではないので、40分の間に2つの参加型活動を行うのは現実的ではないといった指摘もなされた。

さらに、ガイドを行う中でどのような問題が発生するかという点についても参加者同士でそれぞれ出し合った。他の参加者が対応を答えられるようなものについては、対応の難しい問題から外していったが、「見学者の中に『右翼的な』生徒がいた場合はどうするのか」、「教師が活動の中に入ってきたときにはどうするのか」といった問題が出され、参加者にとっても特に困難な状況の一つとして捉えられていた。スタッフAからは、実際にガイドをしているときには、そうした「右翼的な」生徒ばかりを相手にしてはいられないこと、教師に対しては一步下がってみたいというのを最初に言うことなどが助言された。こうした問題に加え、対応が困難だと思われる状況への対処方法については、マニュアルにも詳細に書かれており、実際にガイドを行う前に一読が勧められていた⁽⁸⁾。

④ガイドのリハーサル

実際のガイドを行う前に、リハーサルとして自分でパネルを選び、ガイド・トレーニングの参加者の前で説明を行う時間が設けられていた。ここでは、参加者がパネルを1枚選び、見学者の間にディスカッションを引き出すような質問を考えるよう指示がなされた。参加者は1枚のパネルを5分程度で説明し、聞き役に回る参加者の中で誰がコメントするかをその都度決め、「見学者のグループを巻き込んだガイドになっているか」、「言葉の選び方」、「体の動かし方」といった観点からコメントを行っていた。

スタッフAが行ったコメントも、例えば、写真によっては「戦争」と言うのではなく、「第

一次世界大戦」と明確に述べた方がよいといった言葉の選び方や、説明する際には足を開いてしっかりと立つ、腕は組まない、直立不動よりも少しは身振りが加わる方がいいといった体の動かし方、歴史的事実に関する写真の場合には、事実に関する質問を投げかけたほうが反応が返ってきやすい、写真の説明に2、3の質問がなされると双方向的なガイドになるといったようなものであった。また、参加者の一人が、ユダヤ人移送の写真を選び、アンネ・フランクと関連づけながら説明を行い、「どこに行くのか、それとも連れて行かれるのか、この人たちは知っているだろうか」、「何を持って行っているのだろうか」といった質問をした際には、スタッフAはこれを好例として取り上げ、質問はガイドが知ってもらいたいと思う知識を問うものを入れれば話を展開しやすいと助言していた。アンネ・フランクの家族らの隠れ家とアンネの部屋が写った写真を選んだ参加者は、この写真について背景を説明しただけで、見学者に対する質問をせずに終わったが、スタッフAはこれについては部屋の状況について質問するほうが、見学者の注意が隠れ家の中の状態に向けられるので良いと説明していた。

以上をもって、2日間のトレーニングを終えるのだが、巡回展開催途中に設定されているガイドに関するアドバイジングや巡回展終了後のフィードバック・セミナーについての案内がなされ、すでにグループ・ガイドの予約が入っている分についての担当者の振り分けを行っており、2人がチームとなって対応するように分けられていた。

(3) ガイド・トレーニングの課題

この2日間のガイド・トレーニングは非常に内容の濃いものであるが、巡回展の間、ガイドとして活躍する青少年を育成するには、課題

がないわけではない。筆者が参加した2日間では、数人の生徒が1日目の午前中のみ参加して辞退していった。その理由は「ガイド・トレーニングを受けている間、授業を休まねばならないから」というものであった。授業を休まねばならないことは、募集段階から説明しており、授業を休んでも試験に通るだけの成績を残せるかどうかは自己判断になる。たまたま2日間の間に不得意科目の授業が入ったりすると、意欲はありながらも、それがガイド・トレーニング不参加の理由にもなる。今回の場合、一部の参加者が授業に合わせて出入りしたため、活動が途切れる場面が見られた。また、2009年11月にベルリン郊外の巡回展を見学し、オーガナイザーにインタビューを行った際にも、学校の試験期間等に巡回展の開催が当たってしまうとなかなかガイドとなる青少年を集めることができないといった声もあった。

今回の場合、学校で巡回展を開催し、その学校の生徒がガイド・トレーニングを受けているにもかかわらず、この学校からのグループ・ガイドの申込は筆者が現地にいる時点では入っていなかった。学校で巡回展を実施する際に、ガイドとなるような生徒への呼びかけ、展示の設置やトレーニング、グループ・ガイドのための教室の提供といった面で協力は得られても、巡回展を学校の教育に活用するという点ではなかなか理解されていないという印象を受けた。

こうした課題について、トレーナーであるAFZのスタッフらは、巡回展のコンセプトに対する教師の理解不足が大きいとしており、また巡回展を総括する立場のスタッフは、教会や青少年施設等、公的施設を借りて行うよりも、学校と一緒に実施するのが難しいといった課題も述べていた。各学年や教科のカリキュラム上で第二次世界大戦やナチスの時代を扱う時期と巡回展を開催する時期が合うか否かという課題もあるだろうが、アンネ・フランク巡回展のパ

ネルがテーマとする戦争、ユダヤ人迫害、人権、個人のアイデンティティといったものは、さまざまな形で授業に取り入れられるものと思われる。実際、AFZは教師用のセミナーも実施している。そうしたセミナーの企画や教師の参加の保障も十分に行っていく必要があるだろう。

おわりに

アンネ・フランク巡回展とセットに行われるガイド・トレーニングについて、その概要をガイド用マニュアルを参考にしつつ、筆者の参加記録から述べた。2日間のガイド・トレーニングは実施に際し、さまざまな課題はあるものの、青少年に第二次世界大戦時のホロコーストの歴史や人権侵害のみならず、今日の課題を考える契機をもたらしている。ガイド・トレーニングの1日目の中でも触れたように、トレーニングに参加する動機には、外国人敵視や右翼的な流れに対する青少年なりのなんらかの対抗手段を身につけたいという気持ちがある。かれらは自分たちの暮らす地域やドイツ社会に生じている課題に目を向け、それについて考えている。そうした姿は、トレーナーであるAFZのスタッフが投げかける問いかけに対する応答からも窺い知ることができる。

この点を鑑みると、アンネ・フランク巡回展に付随するガイド・トレーニングは、過去の差別や人権問題について理解を深めるということのみならず、現在の差別や人権問題に立ち向かう青少年を育成する教育活動であると言える。また、ここで育成された青少年がガイドとして、見学者の青少年に過去と現在の差別や人権問題について問いかけていくことで、今後の多文化社会を生きる世代がそれらを直視し、向き合う契機をもたらしている。社会における多様性が増すまま高じていく中で、多様な背景を持つ人々の人権が尊重され、共に生きていくことが目指される。その理念や重要性は理解されなが

らも、現実の社会にはさまざまな差別や人権に関わる課題が山積している点は否めない。

しかしながら、そのような状況において、AFZが展開する、アンネ・フランクを通して差別や人権の問題を考える教育活動が持つ意味は大きいと言えるだろう。この教育活動に参加し、さまざまな形で差別や人権の問題を学んだ青少年が、今後、そうした問題に直面した際に、それに立ち向かうためどのような「市民の勇気」をドイツ社会に対し、見せていくのだろうか。AFZを含め、多様な組織で展開される人権を重視した青少年への異文化間教育活動に今後も注目していきたい。

注

- (1) 差別や人権、平和、異文化理解等に関するアンネ・フランク・ハウスのさまざまな教育活動については、吉谷（2007）、吉谷・伊藤（2009）に詳しい。
- (2) 1994年にベルリンで開催された国際巡回展「アンネ・フランクの世界：1929年から1945年」の実施に関わったイニシアチブ・グループが中心となり、アンネ・フランク・ハウスの承認を得て、1998年にアンネ・フランク・センターとして開所した。活動の目的は、①寛容と相互理解に基づいた社会の構築、②極右主義、差別、反ユダヤ主義に対する防止活動、③多様な、民主的な社会の構築、④他者を尊重した関わりでの促進、の4点である。
- (3) ユダヤ人商店やシナゴークへの襲撃が大規模に行われ、その際に割れたガラスが飛び散った様から「クリスタル・ナハト（水晶の夜）」と呼ばれる事件となった。
- (4) ガイド・トレーニング終了後、ガイド役の青少年に対し、アンネ・フランク・センターからの補助がないわけではない。ガイドを行った青少年が自分たちの経験や意見を自由に書き込めるBlogが立ち上げられたり（ガイド・トレーニングの参加者のみ閲覧可の認証方式）、トレーナーによる展覧会期間の半ばのアドバイジングと終了後のフィードバック・セミナー（半日）が開催され、ガイドを務める青少年の振り返りが行われる。
- (5) 3名のスタッフの内2名が大学生であった。スタッフAはガイド・トレーニングのトレーナーとして活動に関わって2年半経つと言い、スタッフBは2010年秋から活動を始め、ベルリンの常設展でのガイドを経て、今回初めて巡回展のガイド・トレーニングに携わるとのことであった。もう1名のスタッフCは、2007年にベルリン市内の大学で歴史学を修め、在学中からアンネ・フランク・センターの活動に関わって

- おり、今回はスタッフ B のサポートとして同行していた。
- (6) ドイツ国家民主党 (Nationaldemokratische Partei Deutschlands) の略称。右翼急進主義の政党で、反ユダヤ主義や人種主義の主張を行っている。旧東独地域では、この政党が暴力に走る傾向の強い青少年らを取り込んでいる。こうした旧東独地域に見られる右翼急進主義と歴史教育や政治教育の関連については、近藤 (2005) に詳しい。
- (7) ギャラリー・ウォークの手法は、授業でアンネ・フランクを取り扱う教師のために作られたマニュアルでも紹介されている (Anne Frank Zentrum, 2006, S. 42-43)。
- (8) 本文中の問題の他に、グループの中にうるさく、他の見学者の邪魔になるような場合、回答が難しい質問が投げかけられた場合、グループがとても静かでなかなか発言がなされない場合、『アンネの日記』は本物ではないと主張する見学者がいた場合などの対処方法が記されている (Anne Frank Zentrum, 2009, S.18-22)。

参考文献

- Anne Frank Zentrum (2009): Eine Geschichte für Heute. Anne Frank Ausstellung. Handreichung für Ausstellungsbegleiterinnen und -begleiter. Anne Frank Zentrum.
- Anne Frank Zentrum (2006): Anne Frank im Unterricht. Ein Ideenbuch für die pädagogische Praxis. Anne Frank Zentrum.
- 伊藤亜希子 (2010) 「他者への共感的理解に基づく教育活動—ドイツにおけるアンネ・フランク・センターの取り組みから—」, 吉谷武志 (研究代表者) 『現代に生きるアンネ・フランク—異文化理解と偏見を学ぶ—』 (平成 21 年度東京学芸大学道德教育教材・プログラム開発 成果報告書), 13-28 頁
- 近藤孝弘 (2005) 『ドイツの政治教育』岩波書店
- 吉谷武志 (2007) 「異文化理解教育の普及への NGO の貢献—アンネ・フランク・ハウスの事例から—」九州教育学会第 59 回大会 (於琉球大学) 発表資料
- 吉谷武志・伊藤亜希子 (2009) 「多文化社会ヨーロッパにおける多様性に関する理解を促す教育活動—アンネ・フランク・ハウスの異文化間教育活動の展開—」異文化間教育学会第 30 回大会 (於東京学芸大学) 発表資料

Intercultural Education Focusing on Human Rights by Anne Frank Zentrum Berlin: Traveling Exhibition and Guide Training in Germany.

Akiko ITO

University of Yamanashi

This paper aims to show the contents of a guide training for teenagers who are focused on human rights from a traveling exhibition “Anne Frank-A History for Today (*Anne Frank-Eine Geschichte für Heute*)”. The exhibition topics are Anne Frank and the persecution of the Jewish people during WWII in Germany and Europe, and the Holocaust. The exhibition is being held in Germany, a multicultural society, where they have learned to confront discrimination. The traveling exhibition has been organized by Anne Frank Zentrum Berlin, which is a partner organization of Anne Frank House Amsterdam. The traveling exhibition provides a guide training program for teenagers who then accompany youth group visitors. The guide training features the following: firstly, it targets teenagers; secondly, it tries to make teenagers pay attention to discrimination not only in the past, but also in the present; thirdly, teenagers play the role of a guide for this exhibition and their participation is not just passive, but active by encouraging the visiting youths to join in the educational activities. Anne Frank Zentrum Berlin offers guide training for teenagers at the location where the exhibition is being held.

By referring to the guide training manual and by directly participating and observing, I will try to make a point that Anne Frank Zentrum Berlin plays an important role in promoting intercultural education focusing on discrimination and human rights for teenagers because teenagers who participate in the guide training may be able to deal with discrimination in their schools and local communities.

Key Words : Anne Frank, discrimination, human rights, guide training